＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
　　GCOE NewsLetter
[No.16　2009/1/21]

平成20年度第2回gCOE論文賞の募集について
gCOE第5回・第6回国際研究集会の開催について
佐藤教授の最終講義について
次回のオープンレクチャーについて
平成20年度海外派遣大学院生調査報告
「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約
第15回オープンレクチャーの要約
gCOEスタッフ海外出張報告
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

―――――――――――――――――――――――――――――――――
■ 平成20年度第2回gCOE論文賞の募集について
―――――――――――――――――――――――――――――――――

グローバルCOEでは論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2009年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。
応募の受付期間は2009年2月19日（木）～2月27日（金）です。
応募方法について詳しくは下記URLからグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/

―――――――――――――――――――――――――――――――――
■ gCOE第5回・第6回国際研究集会の開催について
―――――――――――――――――――――――――――――――――

第5回国際研究集会『知のテクスト化』
日程：2009年3月5日（木）～7日（土）
場所：パリ東大学（フランス）

第6回国際研究集会『歴史テクストの解釈学：針路、解釈実践、新たな諸問題』
日程：2009年3月7日（土）～8日（日）
場所：東京国際フォーラム

詳しくはグローバルCOEのWebサイトにアクセスして、研究活動＞国際研究集会をご覧ください。

―――――――――――――――――――――――――――――――――
■ 佐藤教授の最終講義について
―――――――――――――――――――――――――――――――――

gCOE拠点リーダー、佐藤彰一教授（西洋史学）の文学研究科での最終講義が下記にて行われます。

2009年2月4日（水）14時～　文学研究科237講義室
題目：「西洋中世史が解決すべき幾つかの大きな問題」

―――――――――――――――――――――――――――――――――

■ 次回のオープンレクチャーについて

2009年2月18日（水）18:00～　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス

講演者、題目等の詳しい情報については、決定し次第グローバルCOEのWebページに掲載します。

■ 平成20年度海外派遣大学院生調査報告

笠井俊和さん（西洋史学）の調査報告を下記に掲載します。

「17・18世紀における北米植民地の船乗りと西インド貿易」

17世紀末、イギリス領ジャマイカの中心港ポートロイヤルは、地震によって崩壊するまで、カリブ海の一大貨物集散地として、本国・北米・アフリカから毎年百隻を超える商船を迎え入れていた。「海賊の楽園」としても知られる富める商港には、人口比にして同時代のロンドンよりも多くの現金が流通し、また、白人一人当たりの輸入額は北米最大の都市ボストンを凌駕していた。同港を訪れる船や商品の動きに関しては、これまで船舶の出入港記録である海事局船舶簿を利用して考察してきたが、それらが詳らかにするのはイギリス帝国内でのヒトやモノの移動である。しかし実際には、スペイン領植民地との密貿易が頻りにおこなわれたことは疑いなく、船舶簿ではポートロイヤルに入港しながらも出港を記録されていない船がかなりの割合を占め、それらの船が密貿易に関与したことが指摘されうる。
今回、そのポートロイヤルに代理人を置いて取引していたロンドン商人トマス・ブレイルズフォードの諸文書（1681～94年）を調査・撮影するため、平成20年12月11日から12月22日まで、ロンドンに赴いた。国立公文書館（The National Archives）に所蔵されるその文書には、中南米のスペイン植民地との取引の記録が書き残されており、特に書簡や船荷証券は、スペイン人と売買した商品や、非合法貿易に要する船員数などを明らかにする貴重な史料である。文書館ではこれらの文書をすべて撮影し、また、同時代の他の一次史料も数点入手することができた。同館の休館日には、大英図書館に足を運び、スペイン領の役人が密貿易の具体的な方法について記した18世紀初頭の書物の現物を閲覧し、マイクロフィルム化された本文を印刷させていただけたのは幸いであった。
いずれの史料も、帝国という枠組みを超えて大西洋世界のネットワークを解明するためには不可欠な手掛かりである。今後は、ブレイルズフォードの文書と海事局船舶簿に記された情報とを照合し、たとえば、文書に記されたスペイン領との取引が、船舶簿にはどのように記録されたか、あるいは記録されていないのか、また、非合法貿易に従事する船長が合法貿易にも携わっているのかどうかなど、入念なクロスチェックを試みたい。ブレイルズフォードの文書は、これまでイギリス帝国の公的な貿易の史料とされてきた船舶簿を、その矛盾点が密貿易の存在を明るみに出すテクストへと変質させられる可能性を秘めている。

■ 「テクスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

松澤和宏（2008年12月24日・25日、2009年1月8日・9日）

人文学が研究対象として措定するテクストは、孤立して存在するものではなく、他の諸々のテクスト群と複雑な諸関係を明示的暗示的に結んでいる。この諸関係は解釈の営みを通して一定の布置として顕在化してくる。前テクスト、間テクスト、メタテクスト、パラテクス

ト（アルシテクスト）との複合的な諸関係の結節点として当該テクストは存在しており、こうした布置の総体を広義のテクストとして捉えるべきである。テクストは複雑多様な文脈を背負い、かつ新たな解釈に開かれた潜在的可能性を蔵している。
　テクストはそれを読解の対象として措定するメタテクスト的操作を抜きにしては存在しえず、かかる操作は解釈者の問題関心に由来し、先導されている。研究対象としてのテクストばかりではなく、解釈者自身もまた、社会的歴史的コンテクストのなかに身を置いており、問題関心をあらかじめ自らが所属する文化的社会的歴史的な先入見の総体によって方向づけられている。先入見のおかげで過去のテクストの継承や研究が可能となるのであり、したがって先入見とはそこから解放されねばならない単なる桎梏ではなく、偏見と叡知のアマルガムである。先入見の総体は言語テクストとしては対象化しきれない性質のものであり、広大かつ深遠な暗黙知にむしろ属する。テクストは相異なる先入見を蔵した著者の地平と読者の地平が遭遇し、そこで対話が繰り返し試みられる場として考えられよう。したがってテクスト布置の解釈学は、解釈者がつねにみずからの問題設定や先入見そのものを吟味反省するという自己理解と自己批評の側面を孕むことになる。

■　第15回オープンレクチャーの要約

2009年1月14日（水）18時～19時　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス
講演者：高橋 亨（文学研究科教授・日本文学）
題目：「源氏物語と後宮文化」

なぜ平安朝に『源氏物語』のような女性作家による文芸が開花したのかについて、「後宮」という視点から考察した。
後宮は日本の規範となった唐（中国）をはじめアジアに広く存在したが、平安朝の後宮には「宦官」がおらず、男子禁制でもなかった。それが、光源氏と藤壺との密通により生まれた皇子が天皇となるという『源氏物語』のような作品を生む基盤であった。
　また、女文字とよばれた「かな」文字の成立が、王朝女性文学を生むことにつながった。こうした視点からは、李氏朝鮮におけるハングルと後宮女性文学との比較が有効である。とはいえ、李氏朝鮮の後宮女性たちの日記文学的な活動は例外的であり、平安朝の女性作家たちによる和歌や日記や物語のように自由ではなかった。
　紫式部や清少納言などは、厳密な意味では後宮の女官ではなく、中宮（皇后）に仕えて摂関家と宮中とを出入りする女房であった。王朝女性文学を生んだ日本の歴史社会的な文化コンテクストとして、摂関（国母）政治と私的な文芸サロンがあった。
　こうした論点から、『源氏物語』というテクストの物語内容と物語表現にわたる特性を検討し、作者〈紫式部〉についても考察した。江戸時代に描かれた画帖や屏風の源氏絵や歌仙絵などの絵画テクストも用いて、楽しいテクスト学を試みた。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

小川正廣（gCOE推進担当者・西洋古典学）
「ハンニバル戦争とスペイン東海岸の古代遺跡群」

2009年1月1日から1月11日の旅程でスペインに出張し、古代ローマ叙事詩の歴史的コンテクストに関する調査を行なった。ローマ帝政期の作家シリウス・イタリクス(Silius Italicus)による古典ラテン叙事詩『ポエニ戦記』(“ Punica”)は、将軍ハンニバル率いるカルタゴ軍とローマ軍が地中海支配の雌雄を決した第二次ポエニ戦争という歴史的題材を扱っているが、

現実の歴史的文脈との対応や関連がテクスト解釈上の重要な問題となっている。とりわけこの戦争の発端となったハンニバルによるサグントゥム攻略の描写は、叙事詩の伝統的なモチーフや技法を集中的に用いており、ドラマチックな文学的叙述に仕上げられてはいるものの、しかしローマの対ヒスパニア政策とその歴史的経緯を踏まえて考察すると、帝政初期の対外政策の微妙な問題とからむ点が少なくない(この点は、同じくサグントゥム陥落に重点を置きながらも、共和政末期の状況下で記述されたリウィウスの歴史書『ローマ建国史』とはやや異なっている)。
今回の旅行では、第二次ポエニ戦争以前にローマとカルタゴ間の協定により勢力境界線と定められたエブロ川の以北と以南の主な古代遺跡と考古学博物館を訪問し、第二次ポエニ戦争当時の前３世紀後半とポエニ戦争後に属州化された時点から帝政初期までの歴史的状況の変化に着目しながら調査した。エブロ川以北では、エンポリアエ（現エンプリアス）、タラッコ（現タラゴナ）、デルトーサ（現トルトーサ）、以南ではサグントゥム（現サグント）、イレタとルケントゥム（現アリカンテ）の遺跡群、およびエンプリアス、バルセロナ、タラゴナ、サグント、アリカンテの考古学博物館が主な訪問先である。日程の関係上、残念ながらヒスパニアでのハンニバルの本拠地カルタゴ・ノウァ（現カルタヘナ）までは行けなかったが、しかしそこに近いアリカンテの遺跡とヨーロッパ有数と言われるその考古学博物館では、エブロ川以南のカルタゴの勢力とポエニ戦後のローマ化の状況を詳細に観察することができた。
今回の最大の関心対象はもちろん、エブロ川以南のカルタゴ勢力内に位置するにもかかわらず、ハンニバルが攻略に半年以上も費やしたというローマの同盟都市サグントゥムである。たしかに、河口付近の低地に聳える高い丘の上にめぐらされた前５世紀にさかのぼるという堅牢な石の城砦は、容易には攻め難いように見える。しかし、はたして世界史上に名を残す天才的軍事家ハンニバルがそれほど手こずるような難攻不落の地形かというと、やはり大いに疑問に思えてならない。おそらくサグントゥムに関するこうした政治的・地理的両面でのあいまいな事情に、ハンニバルから見ればカルタゴ領内のローマ同盟都市をめぐる政治的思惑が、また帝政期のローマ作家イタリクスからすると、ローマとヒスパニアの関係の一面を象徴する歴史的事件の精神的ドラマ化が生じる余地があったのだと推測できるだろう。そう言えば、サグントの城砦に向かって民家の間の通りを登っていると、「町の遺産の古代ローマ劇場を守れ」という抗議の幕がいくつも目についたが、この町のローマ文明の保存遺産は、同じエブロ川以南のアリカンテに比べても明らかに乏しい。現在でもサグントの住民は、ローマの同盟としてカルタゴ軍に対して最後まで抵抗し、結局救助の手を差し延べられず孤立無援のまま滅ぼされた2200年前の彼らの祖先と同じようなディレンマの中で生きているのかという思いがした。

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年2月中旬 を予定しています。

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.16
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

gcoe_infos mailing list
gcoe_infos@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
http://svr.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/mailman/listinfo/gcoe_infos